

# 小田原史談

第86号

発行所 小田原史談会  
小田原市西栢山3310

## 北条時代の曹洞禪寺の

### 建立と僧侶群 (二十周年記念 特集号つき)

中野敬次郎

北条氏の仏教政策は初期の早雲、氏綱の二代の頃は早雲寺を中心とする臨済宗特に関東東泉派の発展と寺院建立に重きを入れていたような傾向があったが、三代氏康の頃になると、勿論初期の方針を踏襲しながらも、さすが巾が広くなつて、各宗派への保護援助も加えられるようになったが、何にしても、大雄山最乗寺を本宗とするいわゆる曹洞宗最乗寺十六派は足柄、小田原地方の最も大きい宗教勢力であるので、氏康はこの宗派に対しても本格的な保護政策を加えるようになった。

その最も著しい事業が、永禄三年(一五六〇)における最乗寺の大普請であったこのことを「小田原記」に

こう書いている。「八月氏康関本最乗寺へ御参詣あり。当時七堂伽藍の建立あり、開山の弟子道了といふ大力の僧ありしが、生れながら天狗となり、此の山を守護せんとし、大禱願を起し、則ち天狗となり山中に住み、悪知識の住りをなせば、必ず来りて障碍をなすこと疑いなし。なほ、寺僧事々しく語りければ、御供の面々大いに疑い末世に不思議なり。などささやきけるに、大風忽ち吹き来り、寺の屋根皆吹き去りて去る。真に風もなく晴れたる天気にして如此のこゝと天狗の所為疑い無しと御信仰あり、則ち普請仰付けられ本如く修造あり」とある。大雄山最乗寺の今日のような発展は、開山了

菴禪師を援けた大森頼明の創建、大森寄栖庵氏頼の中大時期があると思うが、とにかく氏康大普請をけい機として早雲寺中心の臨済宗発展のために押されて一時沈滞気味であった曹洞宗に再び息吹きかけることになったのである。

大森時代の後半には、寄栖庵氏頼の援助をうけて、その伯父で、最乗寺第十世であった名僧安叟宗禪師の大活動によって、いわゆる安叟派の活動が小田原、足柄地方を圧した感があったが、北条時代には実山派が有力になった。最乗寺では了庵禪師が開山以来、その発展とともに開山の流れを汲む流派が遂に十六派と言わ

れるが、了庵禪師の孫弟子で、最乗寺五世春屋宗能和尚が非常な実力者で、その門弟の七哲が各々流派を立て、これを春屋七派といふ(最乗十六派のうち)。久野総世寺や早川藏寺などの名刹を建立した安叟宗能和尚の流派は七派のうち安叟派と称するのである。実山派といふのは七派のうち

永平道元↓孤雲懐辨↓徹通義介↓宝山紹瑾↓了庵禪明(最乗寺開山)  
↓大綱明宗(最乗寺三世)↓春屋宗能(最乗寺五世)↓実山英秀(最乗寺十三世)  
清泉院開山 藏春院開山  
↓大寧了忍(長泉院開山)↓章山宗文(長泉院二世)↓  
↓了庵宗仙(伊豆藏春院二世)↓仁忠繼養(瑞雲寺開山)  
↓才庵宗芸(善宗寺二世) ↓南峯宗柱(清源寺開山)

に大寧に導化の要請があったので、伊豆を去って相模に入ったのである。大森実頼の父寄栖庵氏頼のとき、足柄上郡岩原村の岩田にも臨済宗の一寺を建立して実山を請うて開山としたが、実頼の代になって、この寺を由緒ある地の塚原村の古い庵寺の跡である東明山居跡と呼ばれるところに移すことになったのである(岩原村古城略記)

東明山居跡というのは、その由来を記した記録がないが、恐らく東明禪師山居の跡という意味で、鎌倉時代に建長寺十八世、円覚寺十世であった東明恵日禪師が後に足柄地方の豪族(恐らく沼田氏とそその一族栢山氏

ち春屋和尚七哲の一人実山永秀を祖とする流派であった。実山は最乗寺第十三世で春屋七哲の首座を占めた高僧で「聯燈録」に和尚の伝を記して「実山永秀禪師ハ相州松田氏の子ナリ。最乗寺に出家シテ、春屋ニ礼シテ師ト為ス。春屋庵ヲ豆州田方郡にス。春屋の法系を記すと次のようになる。

卓シ、去ルニ及び師ニ付ス師此ニ居シテ禪宴ノ所ト為ス。永享己未豆州太守藤原憲実地ヲ施シ寺を建テ持氏ヲ追薦ス。今ノ藏春院是レナリ。師此ニ往テ教年、黒白婦スルコト自ラ林ノ如シ長享元年丁未九月九日示寂ス」。

( )に招請されて来て教化に当たったが、その時禪師は栢山の善栄寺を律宗から臨済宗に改めて再興したし、沼田にも臨済宗の一寺を建立し、遂にこの地で終つたと思われる。寺は庵寺になつたが、禪師山居の跡は残っていたので、大森実頼はこの由緒の地に清泉院を移して曹洞の一巨刹を建立したのであった。そして寺号を改めて玉峯山長泉院と称し大寧和尚を招いて開山としたのである。文明二年(一四七〇)であったという。開山大寧の示寂を寺では文明二年十二月十三日としてゐるが、これは恐らく誤りで、寺の起立の年の文明二年と混同したか、或は永正

二年と書くべきを誤ったのではないだろうか。「洞上聯燈録」にある「永正二年十月坐化、寿五十四」とあるのを採るべきであろう。大寧の法嗣を草山宗文と言つて長泉院二世となつた章山和尚は建堂立和尚と共に大寧の高弟としての双壁の大知識で巨利長泉院を完成させた人物であつた。そして、この大寧、章山両和尚が長泉院に永く住居して実山派の法幢を高く掲げて以來、実山派が有力となり、同院は実山派の正嫡となつて多くの寺末、小庵を持つようになり、本山最乗寺へも勢力を加えるようになったのである。

しかし、実山派が北条氏と強く結ばれるようになったのは悦叟宗祈和尚の出現からであつた。悦叟宗祈和尚は足柄上郡沼田村(南足柄市)の出身で、沼田城主沼田左二門尉の嫡男であつた(善栄寺文書に上州沼田城主氏の子とするは誤り)明応六年(一四九七)の誕生であるから、その二年前の明応四年には北条早雲が伊豆から相州入りをした當時であつた。一族滅亡の悲運にあい(北条氏に滅されたるか)、ひそかに家臣配島入道に育てられ、永正二年(一五〇六)九才のとき長泉院に入り、院の二世

草山宗文に預けられて得度した。幼少の悦叟を草山に依託したのは北条氏である。と伝えられておるが、恐らくは鎌倉時代からの西相武家の名門沼田氏を倒した北条氏が、その遺児に対して悲境に同情して深く憐憫の情を寄せたものと想像せられるが、悦叟成人後の活動には常に背後に北条氏の絶大な援助のあることがうかがえるのは、この辺の事情を物語っているものである。それからあらぬか、壮年に達して曹洞禅の修業を了えて、悦叟の活躍が然花々しくなつた。

和尚は草山に寄つて剃髪したが、草山の法嗣は伊勢原日向の石雲寺開山天深宗恩であるので、天深からも教陶を受けたので、法系から言えば天深の法嗣といふことになつている。悦叟宗祈和尚の活動の略歴を記述すると、まづ第一の業績は、小田原谷津の大雲山興徳寺の建立である。この寺はもと小田原城下の八反畑といふところにあつた大雲軒といふ庵寺同様になつた古寺であつたのを悦叟が大古五年に谷津に再興して開山となり、後年北条氏康康夫人瑞溪院を大檀那として大堂宇の建設を行つたものである。北条氏康夫妻を中興開基として

いる。現在は小規模になつて小田原板橋にあるが、板橋へは稲葉氏が承応二年(一六五三)に移したものである。第二の事業は、享祿三年(一五三〇)草山和尚の要請をうけて塚原の玉峯山長泉院の三世となつて同寺の発展に力をつくした。長泉院は元來大森氏建立の寺で、またその庇護を受けていたが、大森氏が滅亡したので悦叟は北条氏を大檀那とする寺院にきり替へた。特に北条氏の重臣松田尾張守憲秀一族は、この寺を恰も菩提寺として、寺領を寄附したりなどして保護を加へたのは有名で、悦叟和尚の誘導によるものであつた。第三には、師天深宗恩の要請により石雲寺の二世住職となつて在任九年、更に再び興徳寺に帰住して在任十三年、この間四方に道風を振興したので、徳望遠近に聞え、実山派の全盛期をもたらしたのである。そしてこの間に大雄山最乗寺の大慈院の輪住ともなつた。第四には、悦叟の一代に最も輝かしい紫衣の勅許と透源大通禅師の徵召拝授とであるが、紫衣勅許は北条氏康が家臣鈴木大学介を京都に遣し、南禅寺に托して後奈良天皇に申請せしめたもので、禅師号も同様に北条

氏康から申請によるものであつた。北条氏自らが禅師号を申請したのは、早雲寺の以天宗清和尚に次ぐもので、他には無かつたから、悦叟宗祈和尚に対する北条氏帰依の程が想像できる。紫衣勅許の繪旨は天文二十年八月十五日で、禅師號を賜つたのは天文二十一年十一月十五日である。その繪旨に勅大雲漢々嫉慈雲。興徳洪々超允徳。宗祈和尚者。汲永平末流。洒甘露於八州。紹大雄後胤。振道風於一國。禪徒為之輻輳。檀信尊之鼎崇。馮馮遙仰重禁闕。遠拝望紫泥。特賜透源大通禅師。天文廿一年壬子曆十一月十五日とある、その高風がうかがえる(繪旨善栄寺所蔵)。第五に、和尚の最後の事業である善栄寺の再建となるのである。清源寺は柏山の隣村鬼柳にあつて天正二年(一五七五)に宗柱が開山して、善栄寺入院前に、在任二十七年間に及んだところである。「相模風土記」の慶長十三年創立説は史実に先後障礙する点があるので採らない。塚原の牛頭山天王院の建立は、この頃、足柄上郡駒形新宿(南足柄市)にあつた碧落院といふ真言宗寺院の

ろから初まる。ところが、この寺は同地の尾崎といふところにある牛頭山天王宮の別当寺であつたが、この頃は衰へて庵寺の姿になつていたのである。和尚はこれより先、善栄寺開山悦叟宗祈和尚の遺命をうけていた。先に述べたように、悦叟和尚は沼田城主沼田左二門尉の嫡男で、沼田一族が滅亡という不運な最後を遂げているので、亡父及び一族の菩提を弔う一寺を建立したいといふ念願を持つていたが、遂に自らは、その目的を果し得ないで終つたので、宗柱和尚に遺命したものであつた。そこで宗柱和尚は庵寺同様に没落している碧落院を塚原に移して曹洞宗に改宗して牛頭山天王院と称名したのである。宗柱和尚は善栄寺の建立が一応終ると天王院に移り住み、善栄寺、天王院両寺の住職を兼帯してその任務を領していたが、自らは天王院の開山とはならないで第二世を称した。そして開山は勸請開山として今はなき本師悦叟宗祈和尚をこれに當て、開基には開山の父前沼田城主沼田左二門尉とした。宗柱が天王院を建設するに當つて、碧落院を牛頭山天王

社から本宮と別当の形を引  
き離し、これを駒形より塚  
原に地を相して移し、新寺  
を建設するまでには相当の  
永い年月を用したもので、  
その基はすでに北条氏の末  
期からできていたと思われ  
るが、完成には慶長十五年  
(一六一〇)までかゝって  
いる。この年正月十七日を  
卜して創立の日として、創  
立と同時に大法会を挙行し  
たと記録されている(善栄  
寺記)。

安東派のこの時代の活  
動はやはり力強いものを持  
っていることは注目すべき  
である。  
元来、安東禪師には優れた  
弟子が沢山あってそれを十  
哲四老と呼ばれているが、  
中にも知られた三人の法嗣  
がある。天室宗運、模堂永  
範、智海宗哲(徹)といっ  
た。  
模堂和尚は伊豆の間宮氏に  
生れて、安東禪師の門に投  
じて修業を積んだ大智識だ  
が、常陸国戸崎城主義則の  
帰崇を受けて、城主がその  
地に牧洞山松岳寺を建立し  
たとき迎えて開山となっ  
てから、同寺に留り、永正  
四年八月十六日、六十四才  
で遷化したので、小田原、  
足柄地方には関係はうすい  
が、他の両和尚天室と、智  
海とは、本師安東禪師の遺  
法を護って足柄地方で活躍  
した。

天室正運は安東禪師の正嫡  
で、安東十哲の首座である  
た。師の安東が嘉吉元年に  
早川(湯河原町)の海蔵寺、土肥(湯河  
原町宮上)の保善院を創始  
した後に天室は譲られて二  
寺の二世となった。  
また保善院の近くに別に高  
源山天寿院も開創しており  
長享二年(一四八八)には  
大雄山最乗寺の本院輪番に  
上堂した。  
これより、北条時代を通じ  
て永正から天文の間、保善  
院五世まで代々保善院の住  
職は最乗寺本院の輪番をつ  
とめ、天文後半から保善院  
に代つて海蔵寺が輪番を動  
ることになったが、これら  
も天室が両寺に永く安東派  
の正脈の法燈を伝えたこと  
によるものであった。  
天室はこのように大きな業  
績を残して、大雄山上堂の  
翌長享三年七月十九日世を  
去つた。  
一方、智海宗哲は師安東の  
老後病を養う隠棲の場所と  
して湯場塔ノ沢の塔峰の中  
腹に明律院(阿弥陀寺)を  
開き、また師の開山した  
久野総世寺の譲りを受けて  
二世となつて、永く生涯を  
ここに拠つて安東派主軸の  
法燈を揚げた。  
明応三年、三浦陸奥守義同  
が養父時高と不和になつて  
三浦を逃れ来つて総世寺に  
おいて智海の弟子となり円  
頂黒衣して三浦入道道寸と  
号するに至つたのは有名な  
話である。

北条時代の一名僧で、生れ  
は伊豆初島で、一字和尚に  
ついて剃髪した。晩年道声  
大いに振い、天文二癸巳年  
正月入寂した。海蔵寺の天  
室正運の弟子のうち最も秀  
れた人物に大樹栗慶和尚が  
ある。  
この人は鎌倉の出身だが、  
十八才のとき天室の門に入  
つて以来生涯師事し安東一  
派の正脈を伝える一人とな  
るに至つた。  
その頃、小田原板橋の南谷  
といふところに石室があつ  
て、ここは大雄山最乗寺開  
山了庵禪師の首座門人で、  
同寺二世であつた昭陽以

遠和尚がかつて修養した旧  
跡の石室であつたので、大  
樹はこの地を慕つて一寺を  
建立した。  
これが南谷山香林寺である  
ところが、この寺は、開基  
を北条氏綱夫人養珠院とし  
ておつて、「相模風土記」  
によると、延宝の頃書かれ  
た寺記(現在失われて無い  
)に、三世竹堂禪師のとき  
養珠院が逝去したので、北  
条氏綱がここに葬り、殿堂  
塔舎を建て莊園を寄進した  
ので、頗る輪奐の美を誇つ  
たものであつたと記してい  
るとあるが、養珠院がここ  
に實際埋葬せられたのでは

なく(恐らく早雲寺に葬ら  
れた)寺が北条氏綱の援助  
によつて殿堂を造立し得た  
ので、養珠院を開基として  
香花院としたものであるう  
とに、天室、智海、大  
樹の三和尚の活躍によつて  
その地つた安東派三寺の海  
蔵寺、総世寺、香林寺が勢  
力を持つようになり、江戸  
時代に入ると、その末寺は  
海蔵寺が三十一寺、総世寺  
が十四寺、香林寺が十四寺  
に達し、いわゆる小田原三  
寺と称せられて、相模西郡  
一派を支配する格式が生ず  
るようになるのである。

# 酒匂石器土器収集報告及び

## 古代の酒匂考察

### 一、序

私の家の庭より土器破片  
が出る。

私の家は小田原市酒匂二丁  
目十七番地二十二号で、旧  
地名は酒匂町字北中宿三百  
十番地(通称中市場)と云  
い昭和六年まで桑畑であつ  
た。

土器破片の出る庭は家敷  
の南面防空壕を掘つた跡地  
などで防空壕を埋めた時の

土砂に混入したのだから考  
へ、たいして関心を持って  
いなかつた。しかし何かの  
参考になりと思い収集保管し  
て置いた。

昔から酒匂地区は土砂の  
堆積地帯で記紀時代頃より  
人の住む様になつたと云わ  
れていた、縄文式や弥生式  
土器など出土しないものと  
思い込んでいた、しかし「  
もしや」と思い地区内の土  
木工事現場などには注意し

観察していた。  
私の家の南二米程の路を  
隔て、内田考氏の畑があり  
昭和四十八年整地して宅地  
とし新築されたその整地の  
工事中地下一・五〜二米地  
点より土器破片の出土する  
のを発見し「オヤ」と想つ  
ていた矢先、酒匂鍛冶遺跡  
を研究されている郷土史家  
川瀬春雄先生が径十程程の  
石(中央が毆打等で凹んだ  
石、以下凹石と云う)を持

って尋ねて来られ古代の石器の一種と思ふが酒匂地区にて二種採集した、この庭より土器が出るというが酒匂地区にも古代より住民が住んでいたのではなからうかと。

凹石を見て「ハッ」として、こうゆう石なら庭の花壇に使っている、又他所でも見掛けた事がある。「ヨシ」酒匂地区の研究課題として捜して見よう、それに防空壕は私の出征中に掘り又埋めた、父の話しては埋める時、印刷局の石炭殻は使用したが他所から土砂は持ってきたと云ふ。

近年開発め立てと昔より大部地層が変わって来たが幸い私は酒匂で生れ酒匂で育った、腕白小僧時代の地相を思い出した、石器の採集を始めた、その結果土器破片の出る地点数ヶ所凹石及び石器具らしき石十数個と数個の布目瓦破片を発見採集した。

又、比較参考用に千代台地、小八幡神社境内の土器片及び布目瓦を採集した。これ等の遺跡物の照会及び収集状況を報告片々、私なりに酒匂古代を考察して見ました、私はもとより素人で地史学に乏しく文章にまとめる格ではありませんが酒匂地区の研究の一助となれば幸いこれに過ぎず

拙文を弄します。

二、地層と

模様石化石

今より約一万年前第四氷河期が終り地球がだんだん暖くなり約五千年前は地球の最温暖期で今より気温が十度程高かったと云う、地球全体の温度が昇れば南極北極の水も溶けて海水面も上昇する、この頃の海辺は今の海岸線より百米程高所であったと云ふ。

私、足柄平野を取巻く山地を探訪し貝類等の化石の出土層を確認して来ましたがその標高がいずれも百米七十米の高所の沢であった東方面より列記すれば

- ① 小田原市沼代(曾我山六本松下方沢)
- ② 曾我剣沢
- ③ 大沢
- ④ 山北町尺里沢
- ⑤ 南足柄市蛤沢
- ⑥ 夕日滝下方の沢

(各沢にて貝化石採集保管) これ等いずれも足柄平野を取巻く等高線上に当り粘土又は粘土砂の中に貝その他が埋もれて固まった泥土石である。約五千年前はこの地線が海岸線で足柄平野は海底と云ふ事になる、これより、又寒冷期に入り小さな暖帯を繰り返しつつ約二千年前

より大体今の海岸線に落ち付いたと云ふ、しかし伊豆箱根丹波と太平洋地層の接合点とかで昔より有数の地震地帯で大古より幾度ももの天変地変を経て今日に至ったと云ふ、近年話題になっている駿河湾地震説や関東大震災で出来た国府津、松田断層などその一例である。

私山歩きを沢一つ、丘一つ越えると全然地層が異なったり逆断層や正断層不整合などの現象によく出合う、酒匂平野も幾度かの地変により隆起陥没を繰り返して或時期は丘に、又或時期は湖沼の底になった(曾我精神病院附近の発掘調査報告による三重遺構はその良き一例と云へる)

私は酒匂地区の土木工事現場でこの項の遺品に関係あるものか、魚の如き模様の入った石一個と骨の化石片一個を採集した。又酒匂地区×地点の試掘地層図と合せ考へる時堆積と陥落の天変地変を繰り返した事を重ねて現在に至った事は間違いない様であります。

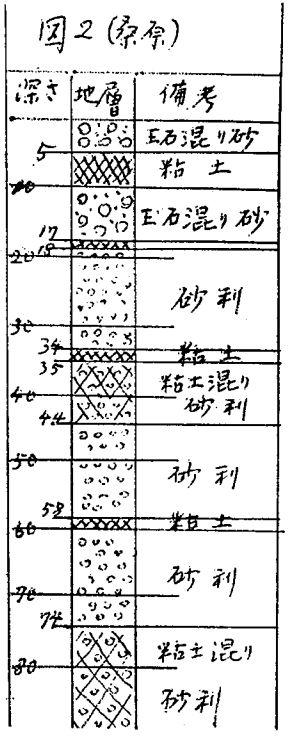
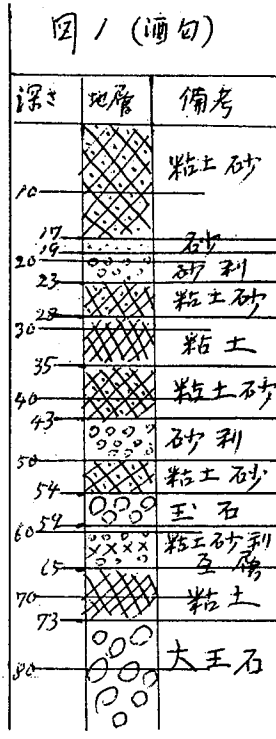
① 酒匂地層

酒匂地区の×点(詳しくは大蔵省印刷局小田原工場構内旧地名酒匂町宇東長耕地と西中道、石領の字界地

点)を或る目的で八十米掘ったその時の地層図(図1)によると 粘土砂層(貝化石の出土する層と類似している) 粘土層(黒いヘドロ状の固まりで声の腐蝕した炭

化物や高師小僧が含まれている 砂利層 玉石層 これ等の互層であるこの層の変化が天変地変の年輪でわなかるうか。

なは参考に桑原の富士通橋下流の桑原市菅住宅附近、酒匂川河畔の地層図(図2)と対比されたい。(桑原地区は水量豊富にて掘抜きにて清泉湧き出る)



昭和三十六年三月大蔵省印刷局の宿舎建築工事中現場(旧地名酒匂町宇十二た)にて一個の石を採集したこの石わ大きき十五厘米×厚さ四厘米の褐色の泥土石で中央部に魚の様な緑色の模様が入っている。

着し押形を作りこの跡に緑色の粘土が充填して出来た石ではなかるうか。

この地区地下二・五米まで赤土でそれ以下粘土砂層で地下約四米の地点より下方した、地下八十種より下方にわ石岩等皆無でこの模様石一個と約十米下方より少量の砂利が混じっていた。

(つづく)

